

# ツレないネコに惹かれるワケ～進化・認知科学研究からの考察

文：尾形聡子



講演する齋藤慈子先生

イヌと双璧をなす伴侶動物のネコ。世界中を見渡してもイヌとネコは伴侶動物として揺るぎない地位を築いています。日本ではネコの飼育頭数がイヌと肩を並べるようになってきていることから、ネコという生き物への興味や関心が近年高まっているのを感じます。しかし研究の世界から双方を見てみると、前回の第4回例会『ヒトと共生を可能とするイヌの特殊な進化』で麻布大学の菊水健史教授がお話されておりましたように、イヌの認知科学研究は世界的に行われているのに対し、ネコの研究はまだそれほど多くないのが現状です。

イヌからネコへと主役がバトンタッチした第5回例会では、武蔵野大学教育学部児童教育学科講師の齋藤慈子先生が『なぜネコは伴侶動物となりえたのか？－進化と対ヒト社会的認知能力からの考察－』というテーマでご講演されました。現在は発達心理学を専門とされていますが、以前所属していた東京大学総合文化研究科ではイヌやネコの行動を観察して分析する行動学的手法を用いた研究をされており、現在もネコの調査、研究を続けていらっしゃいます。

「結論から言ってしまうと、「なぜネコは伴侶動物となりえたのか？」ということに対する答えはきちんと出ていません。ですので今日は、それを考察する形でお話していきたいと思っております。」

イヌと比べればなかなか触れる機会が少ないネコの研究、ヒトとの共生の歴史、ネコの行動や特性の進化についてなどを紹介されつつ、“なぜヒトはネコに惹かれるのか？”というシンプルで普遍的な問いに対し、齋藤先生ご自身の考察を交えながらのお話は、ネコに対する興味を大いにそそられるものでした。

「日本だけでなくヨーロッパなどでも、ネコの飼育頭数が増えてきています。そのようなことを鑑みても、イヌとネコは伴侶動物として対等な地位にあるとっていいでしょう。」

## ネコはなぜ魅力的なのか？

イヌとはちがう、ネコの魅力とはどのようなものなのでしょうか。

「ネコ好きな方なら賛同していただけると思うのですが・・・まず、見た目がかわいいという点ですね（笑）。

ネコのかawaiiさのポイントとして、大きな目と小さな口元が挙げられます。もちろんイヌにもこういった顔の形態の特徴をもった犬種がありますが、この特徴はネコに共通している特徴です。」

生物が持つかawaiiさには、種を超えて共通する特徴があります。

「動物行動学者のローレンツ博士が、動物の幼体にはかawaiiと感じる共通した特徴があると言っています。頭が大きい、おでこが出ている、大きな目が顔の下の方についている、あごが小さい、ぎこちない動き、といった特徴を、彼は幼児図式 (Baby Schema) と呼びました。このような特徴は、養育行動をとる親 (大人) に、養育が必要とされる幼体をかawaiiと感じさせるもので、そこから養育行動が引き出されるのだと指摘しています。」

ローレンツ博士が幼児図式を発表したのは 1943 年のことですが、現在もなお“かawaii”を科学的に知る研究は盛んに行われているそうです。

「たとえば、赤ちゃんの写真を加工して幼児図式を強調したり減弱させたりした顔を何パターンか作り、それを見せて、どのくらいかawaiiと思うか、養育したいと感じるかといったアンケートをとると、やはり、幼児図式にある大きな目などの特徴をより強調した赤ちゃんほどかawaii、養育したいと評定される傾向があることが示されています。」

ネコが持つ大きな目や小さな口といった特徴は、まさに幼児図式に当てはまるものです。

「ネコの見た目をヒトが自然にかawaiiと感じるのは、科学的な見方をすれば、幼児図式に当てはまるからと言えらると思います。」

では、イヌにはない、ネコの行動面での魅力にはどのようなものがあるのでしょうか。

「ネコは媚びてこない、ツレナイところがありますよね。これはイヌには見られない特徴だと思います。とあるアンケートでは、ネコ好きなヒトの多くがネコの距離感や自立心が魅力的だと言っています。ヒトの行動に左右されずに自分の思うままに生きていく、という特徴がネコにはあると思います。」

実際に、ネコがヒトに媚びない行動をとることはこれまでの研究でも示されているそうです。

「知らないヒトと飼い主さんがネコを撫でたときに、どのような反応をするかが調べられました。もともとは飼い主さんが撫でたときの方が喜ぶのではないかと予想されていたのですが、実際には飼い主さんが撫でたときのほうがネガティブな行動が見られたという結果になりました。また、私たちが行った研究では、ネコの名前を呼ぶヒトが飼い主さんでも、知らないヒトでも、ネコの反応の様式は変わらないことが示されました。」

こちらの齋藤先生の研究の詳細にはこちらの[リンク先](#)からご覧いただけます。

「イヌなら名前を呼ばれば尻尾を振って近寄っていくと思うのですが、ネコの場合は顔を向けたり耳を向けたりといった音源を定位する反応くらいしか見られませんでした。つまり、名前を呼ばれたときに積極的にコミュニケーションを取ろうとするような行動はほとんどしない、ということです。まさにネコのツレナイところがあらわれている結果であると思います。」

## ネコはなぜツレナイのか？～家畜化の歴史からの考察

このように、ネコのツレナイ行動は大きな特徴であり魅力でもあるのですが、では、ネコがツレナイ行動をとるのはどうしてなのでしょう。

「ネコのツレナイ理由を家畜化の歴史から考えていきたいと思います。古代エジプト時代にネコは神様として崇拜されたり、ミイラとして保存されていたりしたことから、ネコがヒトと暮らし始めるようになったのは4000年前くらいではないかと言われていました。その後、2004年にキプロス島にある9500年前の遺跡に、ヒトとネコと一緒に埋葬されているのが発見されました。そのことから、だいたい1万年前くらいには共生が始まったのではないかと今では考えられています。」

キプロス島はそもそもネコがいない島だったそうです。そのような島でネコがヒトと一緒に埋葬されているということが重要な点で、ヒトとネコが親しい間柄にあったことが推測できるのだそうです。

「遺伝子解析による研究も進められています。さまざまなネコの遺伝子比較から、ネコの発祥の地はアラビア半島あたりではないかと言われています。また、ネコの祖先種は、昔、ヨーロッパヤマネコという説もあったのですが、現在はリビアヤマネコではないかと言われています。」

祖先種と考えられているリビアヤマネコは、どのようにしてヒトと共生し始めたのでしょうか。

「ネコの発祥の地アラビア半島付近は、農耕発祥の地でもあります。1万年前くらいに農耕が始まり、小麦などの穀物が蓄えられるようになりました。穀物を蓄えればやってくるのがネズミです。そのネズミを追いかけてネコも近寄ってきたのではないかと考えられています。ヒトにとってネズミは蓄えている穀物を食べてしまう害獣ですが、その害獣を捕まえるネコは益獣になります。厄介なネズミを退治してくれるのはありがたい、ということで共生が始まったのではないかということです。ですから、ネコは野生的な本能があるほうが、ヒトにとってはより都合がいいわけです。」

もうひとつ、ネコの野性的な本能行動が残されてきている理由には肉食に特化している点が考えられるそうです。

「今はキャットフードの質が向上しているので問題ないのですが、以前はヒトが与える食餌だけだと栄養素が不足してしまっていました。そのため自分でもエサを調達する必要があり、野性的な行動が残されてきたのだろうと言われています。」

イヌに比べると本能行動を色濃く残しているネコ。野生が強いネコに対して、そもそも家畜化されていると言い切っているのか、という疑問も出てくるといいます。

「家畜化の過程としては、まず、野生動物を単に飼育することから始まります。つぎに、ヒトが繁殖を操作するようになります。この段階まで来て、その動物は家畜化されたと言えます。ネコについて考えてみると、もちろんブリーダーの方が繁殖しているネコもいるのですが、ある文献では自由繁殖するネコは97%以上と書かれています。つまり、ネコの繁殖のほとんどがヒトの手によるものではない、ということになるのです。とすると、ネコは家畜化の定義に当てはまっていない、完全に家畜化されていない動物ではないか？とも考えられるのです。この点もまたネコの特徴と言えます。」

さらにネコは、ヒトによる餌の供給が困難なこと（栄養不足になりやすい）、順位のある群れで生活をせずに縄張りを作るという、家畜化の障壁になる特徴があります。

「ウマやヒツジなど多くの家畜化された動物は、集団を作って、その中でそれなりに序列がある生活をしています。それはヒトがその序列の一番上に立って家畜を操作しやすいからとも言われています。しかしネコはそのような特徴を持たず、単独性でなわばりを作るという家畜化されにくい特徴を持つのです。」

この点も、使役動物としての長い歴史を持つイヌとは大きな違いになります。

「ネコの祖先種のリビアヤマネコが単独性であり、かつ、ネコは野性味あふれていたほうがいいため、ヒトが積極的に選択交配を行ってこなかったということを考え合わせると・・・ネコが自由気ままでツレナイ態度をとるのは当然なのかな、と考えられるわけです。」

## では、ネコはなぜ伴侶動物になったのか？

ただヒトのそばにいただけでなく、ツレナイながらもネコが家族の一員とみなされるようになったのはどうしてなのでしょう。

「ひとつに、祖先種のリビアヤマネコがヒトに近づいてきやすい性質を持っていたからではないかと言われていきます。小型のネコ科の動物を飼育している動物園で、ヒトのそばで座ったり横になったりすることがあるかどうかというアンケートを取ったところ、リビアヤマネコや **ジョフロイネコ**、**マーゲイ** などの 8~9 割くらいの個体にそのような行動が見られたという結果になりました。これは野生動物ではありえない行動ですので、これら小型のネコ科の動物にはそもそもヒトを怖がらずに親和的な行動をする特性が備わっていたことが示唆されます。ですから、リビアヤマネコがヒトに近づいていくことができたため、そこからヒトとの共生につながっていったのではないかと考えられているのです。」

これは、進化の考え方で前適応と呼ばれるものだそうです。前適応とは、ある環境に生き物が適応していく過程で、ある機能を持って維持されていた形質がある時点で転用されて別の機能を担うようになり、新たな適応的な形質として進化することをいいます。

「ここからは推測の域をでない話になるのですが、ネコが伴侶動物になったのはヒトとの共通点があることも理由にあるのではないかと考えています。そのひとつが形態的な特徴です。ネコはイヌと比べると幼体時と成体時の頭の形が変化しにくいことが分かっています。ヒトの場合もチンパンジーと比べると、子どもと大人の頭の形はそれほど大きく変化しません。これはネオテニー（幼形成熟）という、幼いときの形がおとなになっても維持されているという現象です。」

イヌにおいても、愛玩犬の中にはマズルが短い形態を持つように繁殖される犬種があるなど、ネコと似たような幼形成熟が見られますが、これは人為淘汰によるものでしょう。

「もうひとつの形態的な特徴に、顔の前に目がついていることがあります。両眼で見ることができる視覚野は、目が横についている馬では 57 度、イヌは犬種によってばらつきがありますが 78-116 度、ネコは 120 度、ヒトは

140度となっています。この視覚野が広いと両眼立体視がよくできるのですが、それは自分と獲物の距離を視覚的に把握する捕食者となる動物の持つ特徴でもあります。」

霊長類は進化する初期の頃から両眼立体視ができる形態を持ち、捕食者として生活していたと言われているそうです。現代の私たちヒトにも、そのときからの特徴が残っていると考えられています。

また、ヒトとネコの視覚には類似性があるがゆえに、視覚の情報をどのように脳が処理しているのか、視覚野の神経がどのように発達するのか、といった神経科学的な研究の対象とされてきたそうです。ヒューベル博士とウィーセル博士がノーベル賞を受賞した有名な研究に、線の傾きに反応する細胞があることを発見したものがありますが、その細胞はネコで最初に発見されています。

「ヒトとネコの共通点、ふたつめは認知能力です。ほかの個体がやっていることを見て真似するという社会学習の能力があること、そして教育をすることです。」

動物の世界での教育（Teaching）の定義は、①ある個体 A が未経験の個体 B がいるところだけで行動を変える、②A はコストを払うが直接的なベネフィットはない、③A の行動の結果、B は知識や技術を素早く効果的に獲得する、とされています。

「いうまでもなくヒトは教育を行っていますよね。いわゆる教育という枠組みの中でも、日常生活の中でも Teaching が行われています。今のところ、Teaching はヒトとネコ、ミーアキャットでしか見られない行動です。チンパンジーとイヌは社会学習の能力はありますが、いずれにも Teaching は見られません。」

たとえば、チンパンジーが固いナッツを石の上においてハンマーで割る、というような複雑な行動ができるようになるには、自分で試行錯誤するか、他の個体がやっているところを見て学習するしかないそうです。母が子に教えることはありません。

「ネコでは、母ネコが子ネコに獲物の捕らえ方を教えます。母ネコは最初、子ネコの前で捕まえてきたネズミを殺して食べますが、徐々に母ネコはネズミを捕まえてきても自分では食べなくなっていくます。子ネコの発達に合わせて最初は死んだネズミ、次に弱ったネズミを与えて遊ばせ、そして食べさせるというようにして、少しずつ子ネコを教育していくのです。」

ヒトと共通点のもうひとつは、成猫になっても遊ぶということでした。

「これはヒトとネコだけでなく、イヌにも共通する特徴になりますね。ネコとヒトの形態的な共通点や認知的な共通点が、ネコがヒトの伴侶動物になってきたことにどのようにかかわってきたのか、ということについては私自身も考えている段階です。しかし、このような共通点により、ネコが伴侶動物になることが促進されたのは間違いないだろうと思います。」

## 1万年かけて進化してきたネコ

ネコが家畜化されたのは1万年前と考えられていますが、それから今に至る間にヒトと暮らしてきたことで、ネ

コは進化してきています。

「ヒトはネコの繁殖をあえて操作してこなかったという歴史があるので、ネコの進化は人為淘汰ではなく、自然淘汰によるものではないかと考えられています。ヒトも環境の一要因としてネコの進化に関わっている、という考え方です。」

実際にどのような部分でネコは変わってきているのでしょうか。

「先ほど祖先種のリビアマネコは単独性の種だとお話ししましたが、そこからネコの中に社会性が生まれました。たとえばヒトがネコに与える食餌をある一定の場所に持ってくるとします。そうすると、そこにネコがたくさん集まってきますよね。すると、その場所に集団が作られるようになります。イヌの集団とは異なりますが、お互いがお互いを許容しあって一定の空間で生活することができるようになってきた、ということです。」

ほとんどのネコ科の動物は単独性の種ですが、ライオンとチーターは例外で群れをなします。

「ネコは集団生活ができるようになっただけでなく、その中で社会的な順位を作るようにもなりました。多頭飼いで同様です。これに付随して、血縁のないネコ同士がじゃれて遊んだり、劣位のネコが優位のネコに向かって尻尾をあげて近づいていって挨拶するといったネコ独自のコミュニケーションも生まれてきました。」

さらには鳴き声にも変化が出てきているそうです。

「リビアマネコとイエネコのニャーという鳴き声をヒトが聞き比べる研究では、餌と攻撃両方の状況下での鳴き声について、いずれもイエネコの鳴き声の方が心地いいとする評価になりました。これは、ヒトの知覚的なバイアスがかかった結果、鳴き声に変化してきているのだと思います。積極的に選択はしていなくても、可愛い鳴き声を発していると感じた個体に餌を多く与えていたら、可愛い鳴き声を発する個体が増えていき、いつの間にかイエネコは可愛い鳴き声になった、ということなのだと思います。」

また、ネコにはニャーだけでなく、ゴロゴロという鳴き声もあります。

「ゴロゴロは、気持ちいいときに発するときと、餌が欲しいと要求するときとがあります。気持ちいいゴロゴロと要求ゴロゴロでは声の周波数が異なることが分かっています。ヒトが両方のゴロゴロを聞き比べると、要求ゴロゴロの方に対して不快な感じや催促されている感じを受けるそうです。要求ゴロゴロにはヒトの赤ちゃんの泣き声に近い周波数が出ているそうなのですが、それをネコはヒトに対して利用してきているのではないかと考えられます。つまり、要求ゴロゴロがうまくできたネコは餌をたくさんもらってきた、というようなことが起きていたのではないかとということです。」

そしてネコはヒトに対しても社会性を発達させています。

「ヒトに懐くようになった、というのが大きな点です。飼育環境や遺伝要因があるともいわれていますが、生後2~7週の間が社会化の感受期で、その間にいかに色々なヒトと接するかが大人になったときのいろんなヒトへの順応の高さにつながると言われています。私のうちではボランティアさんが保護したネコをもらって飼っているのですが、おそらく元野良です。面白いのは、社会化の時期にヒトと全然接していなかったと思われるような

ネコでも特定のヒトにはすごく懐きますし、甘えもします。これはとても不思議なことだと思いますので、いずれ研究してみたいです。」

ネコの社会性の遺伝的背景を探る研究も行われているようで、まだ論文発表されていない京都大学で行われた研究についての紹介がありました。

「社会行動に関係すると言われている、バソプレシンというホルモンの受容体の遺伝子配列を調べた研究があります。イエネコと、トラやライオンなどほかのネコ科の動物と比較したところ、イエネコだけにその遺伝子の多様性が見られることが分かったそうです。さらに、その多様性の中でイエネコだけに見られるタイプの遺伝子を持っている個体は、ヒトから逃げにくい特性を持つ傾向にあることも分かったそうです。これは、ネコがヒトと暮らし、進化してきた中で、そのタイプの遺伝子を持っていた方が餌をもらえるなど生存に有利だったことから、現在のネコにも受け継がれてきているものだと考えることができます。」

## 古典的な心理学研究でも双璧をなすイヌとネコ

古くから、イヌやネコは心理学の研究対象とされてきました。

「古典的な研究としては、1927年に発表された“パブロフのイヌ”がとても有名です。学習理論のひとつである古典的条件付けと呼ばれるもので、ベルだけを鳴らしてもよだれは出ない、けれど、ベルと餌を同時に提示し続けると、ベルを鳴らしただけでよだれが出てくるといった発見です。一方ネコでは、“ソーンダイクのネコの問題箱”という1898年の研究があります。これはオペラント条件付けとして知られているものになります。」

ネコの問題箱には、かんぬきのかかった扉があり、中にペダルのようなものがついています。そのペダルを踏むとかんぬきが外れて扉が開く仕組みになっているものです。

「箱に入れられたネコは、最初のうちは状況が分からずウロウロするだけなのですが、何かの拍子でペダルを踏むことになります。すると、扉が開いて外に出られる状況になるのですが、これを何度も繰り返していくことで、ネコはペダルを踏めば外に出られることを学習していきます。」

ネコの問題箱の研究で示されたように、何らかの行動をすると良いこと／悪いことがあります、その行動が増える／減ることをオペラント条件付けといいます。これらふたつの有名な実験にあるように、その当時はイヌやネコは心理学研究によく使われていたそうです。

## 社会的認知力についての研究～イヌの場合

では現代はどのような研究が行われているのでしょうか。ネコの認知能力研究についての話に入る前に、まずはイヌがヒトとどのような調和のとれた行動をとるのか、代表的な研究について紹介がありました。イヌの特徴的な認知能力のひとつに、ヒトの動作や視線を読み取るのがとても得意なことが挙げられます。

「有名な認知実験のひとつに指差し実験といって、ヒトが指をさした方に向かうかどうかを見るものがあります。

ヒトの子どもですと、8〜9 か月くらいから自然に指差しをするようになり、指差しを手掛かりとして使うようになるのですが、ヒトに一番近い動物であるチンパンジーよりも、イヌの方が指差しに対する理解力が高いことが分かっています。」

さらに、①イヌはヒトが自らを見ているか見ていないかを認識し、それによってとる行動を変えることができること、②自分で解決できない課題を課されると、ヒトの顔をじっと見つめてヒトに問題を解決してもらおうと頼ること、③未知の物体や状況にあるとき、飼い主の表情を見て（社会的参照といいます）それを参考に自分の取る行動を判断すること、④ヒトのあくびがイヌにうつる、ヒトの模倣をすること、といった認知能力があることが、これまでの研究で示されています。

「息子のあくびは瞬時にうつるのですが、電車の中の見知らぬおじさんのあくびはうつりにくいです、笑。あくびは親しい間柄にあるほうがよりうつりやすいのですが、イヌも知らないヒトより飼い主さんのあくびがうつりやすいことが分かっています。ちなみに犬の祖先であるオオカミは、オオカミ同士であればあくびがうつります。」

イヌの場合はヒトという異なる種の生物からもあくびがうつりますが、オオカミには同種間だけになります。イヌのこの能力はイヌがイヌとなって新たに獲得した能力というより、イヌの祖先であるオオカミにもある程度存在していて、イヌはそれを進化させてきたのだらうと考えられています。

「麻布大学の菊水先生がサイエンスに出された研究で、イヌとヒトが見つめ合うことによって出るオキシトシンというホルモンを介して、ポジティブな絆が形成されていることを生物学的な観点から示したものがあります。このような研究から見ても、イヌはヒトとの長い共存の歴史を持ち、使役動物として働きつつ、ヒトと深い絆をつくれるように進化してきたと言えると思います。」

## 社会的認知力についての研究～ネコの場合

ではネコの認知能力研究はどのようなことが行われているのでしょうか。

「研究により、ネコも結構対ヒト社会的認知能力を持っていることが分かってきています。まず、当然のことのようではありますが、ネコは知っているヒトと知らないヒトを区別し、飼い主の声を聞き分けます。最初の方で少しお話しましたが、知らないヒトと飼い主さんがネコを撫でたとき、飼い主さんが撫でたときのほうがネガティブな行動が見られたという研究や、飼い主の声と知らないヒトの声への反応を調べた実験があります。これらは、ネコが飼い主と知らないヒトの見た目や声をしっかり区別できていることを示すものです。」

イヌのところでも登場した指差し実験が、ネコでも行われているそうです。

「ハンガリーの研究者がネコとイヌを比較した研究を行っています。いろいろなタイプの指差し実験をしたところ、イヌもネコも統計的に差がない程度に指差しを理解していることが示されました。」

しかしひとつ、イヌとネコには大きな違いが見られたそうです。

「イヌのところでお話しましたが、イヌは解決できないような問題に直面すると飼い主の顔を見ます。しかし、ネコは見ません。残念ながら、なのか、それは嬉しいことなのかは分かりませんが、笑。ネコは飼い主に頼らず自分で問題解決しようと頑張ります。また、未知の物体に遭遇したり、未知の状況に置かれたとき、飼い主の表



情を見てそれを参考に自分の取る行動を判断するという、社会的参照はネコもします。つまり、ネコもヒトの表情をある程度読めているということです。」

齋藤先生のグループでは、ネコがヒトの視線を理解しているかどうかを調べる実験を行ったそうです。

「ふたりの実験者がそれぞれ①ネコを見て名前を呼ぶ/ネコを見ているだけ、②猫を見ているだけ/ネコを見ていない、③ネコを見ずに名前を呼ぶ/ネコを見ない、という3つの状況で、ネコがどちらのヒトから餌をもらうために近づいていくかを調べました。その結果、①のネコを見て名前を呼んでいるときだけ、ネコはそちらのヒトに餌をもらいに行きました。顔の情報と声の情報の両方を合わせて、自分に注意を向けていることを理解しているのだろうということが示唆されました。」

さらにネコは、ヒトの感情状態も察知していることを示す研究が行われているそうです。飼い主にうつ傾向があると、ネコが頭やわき腹をこすりつけるという行動が多く見られ、ネコが慰め行動をしているだろうことがそこから推察されています。

「ヒトの表情や姿勢によって、ネコが行動を変えることも示されています。飼い主さんが幸せそうな表情をしているとそばにいたことが多いのですが、怒っている表情のときにはあまりいない、という結果がでています。一方、見ず知らずのヒトが同じように表情を変えても、ネコの行動には影響がなかったようです。」

ネコのヒトに対する愛着も調べられています。研究結果に違いがみられるなどはっきりした結論は出ていないようですが、ヒトと同じ愛着があるかどうかは分からないものの、類似のなにかはネコにもあるのではないかと齋藤先生は考えているそうです。

「これまでの話の簡単なまとめになりますが、ネコは家畜化の定義からすると完全に家畜とは言えないかもしれませんが、それでも前適応していたり、ヒトとの形態的・認知的・行動的共通点があること、イヌに比べれば短いとはいえ、1万年前からヒトと共存することで進化してきました。社会的認知力の研究からは、イヌと同レベルとまではいかないにしても、意外とヒトのことを理解していることが証明されつつあります。ただし、ヒトに対する行動の特徴はイヌとはまったく違ってきます。」

	イヌ	ネコ
家畜化の時期	5万~1万年前 ヒトが狩猟採取をしていたころ	1万年前 農耕が始まったころ
特徴		
見た目	さまざま	かわいい（大きな目、小さな口）
行動	調和のとれた行動	ヒトに左右されない、ツレナイ行動
認知能力		
指差し	理解している	理解している
ヒトから受ける視線	理解している	理解している
ヒトに頼るために視線を送る	する	しない
ヒトの表情を伺う（社会的参照）	する	する
同種間の社会的学習	する	する

## 伴侶動物に求められるものとは？

講演最後は、伴侶動物に求められるものについてのお話でした。

「家族である、ということがひとつです。飼い主さんに聞くと、イヌやネコは息子であったり娘であったり、あるいはパートナーと考えている方がとても多いです。そしてかわいさですね。特にネコにはかわいさがあると思っています、笑。もうひとつは、世話あるいは自分を必要としてくれることです。これら3つが、ヒトが伴侶動物に求めていることではないかと思います。」

そしてそれは、ヒトの子どもが持っている特徴でもあると言います。

「どのくらい意識している方がいるかは分かりませんが、イヌやネコを世話する対象と思って飼っている面があるのではないかと思います。つまり、自分を必要としてくれる存在であることを伴侶動物に求めているのではないかと思います。ヒトが伴侶動物に求めるものはイヌネコ共通な点も多いと思いますが、イヌとネコではヒトに対する行動が違う、極端な言い方をすれば愛情の示し方が違うということをしっかり認識しておくことが大切だと思います。」

イヌとネコの行動が違うだけでなく、イヌタイプかネコタイプかによって、ヒトの性格にも違いがみられるそうです。

「ビッグファイブというヒトの性格特性を示す指標とされるものがあるのですが、外向性・愛想のよさ・誠実さはイヌタイプの方が高く、神経質・開拓性（新しいものに寛容、知的好奇心が旺盛）についてはネコタイプの方が高いという結果が出ています。自分はどのような性格かを認識したうえで、自分に合った伴侶動物を選んでいただけるといいのではないかと思います。」

そして最後に次のように結ばれました。

「ペットショップで見たネコがかわいいから、イヌは散歩が大変だからといった理由でネコを選んでいる方が増えているのではないかと心配しています。それだけの理由でネコを飼ってしまうと、“なんだかネコってツレナイし、（イヌほど）懐かないし、かわいくない”となってしまうかもしれないと思うのです。それではヒトもネコも両方が不幸になってしまいます。世の中の人々が広くネコの特性、イヌの特性それぞれをきちんと把握したうえで、どちらと暮らしたいのか選んでいただければと思っています。」

\*\*\*\*\*

齋藤先生の講演の後には、日本ペットサミット会長で東京大学獣医外科学教室教授の西村亮平先生の進行のもと、恒例の質疑応答の時間に入りました。講演時とはまた違った和やかな雰囲気のもと、次から次にさまざまな質問が齋藤先生へと寄せられました。



齋藤先生にさまざまな質問が寄せられた質疑応答の時間

ー最近ネコへの注目が高まっているのを見るに、それは、現代社会とネコがマッチしている面があるからだと感じています。会社のスタッフとの付き合い方を考えても、いわゆる体育会系のように画一的ではなく、ある程度の距離感を保ってそれぞれの個性を重んじるような、多様性を認めていくような付き合い方が好まれるようになってきているといえますか。そのあたりの先生のご意見をお聞かせください。

齋藤先生：今の社会は色々な面でヒトの多様性を認めるような風潮になっていると思います。教育の面でいえば発達障がいも個性であるにとらえたり、LGBT（同性愛者、両性愛者、トランスジェンダーなど）の社会的な受け入れも話題になっています。働き方にも多様性が認められてきていますよね。もしかしたら、右向け右といった体育会系的なカラーを持つ人が犬好きの中の一部にいて、そういう感覚が現代では受け入れられにくくなっているのかもしれないと思います。皆と同じことをしていたり、皆と同じように頑張っても、それでは今の社会でやっていけないようになってきていることもあるのでしょね。そう考えますと、新しいことを受け入れたり、知的好奇心をもって違うことに挑戦してみるという開拓性の高さが求められる現代社会とネコがマッチしているのではないかな、と思います。

ーこれまで何頭かネコを飼ってきたのですが、今暮らしている一番歳下のネコがいままでになくイヌっぽいのです。それは親離れをしていないためなのか、最近のネコに見られる傾向なのか、何か理由があるのでしょうか。

齋藤先生：個性の違いによるところが大きいと思います。が、講義の最後にお話ししましたように、ネコのツレナイところが好きだからという理由で飼う人が減ってきている可能性があるとも思います。そうすると、イヌっぽい性格のネコの方がヒトから可愛がられるようになり、イヌっぽい性格の子孫がだんだん増えてきて、いずれネコもイヌっぽくなってしまわないか、ということが起こるかもしれません。そうなることを私は危惧しています。ほかには、たとえば純血種でヒトの管理下で繁殖されているネコの方が、調査するときにヒトに対して愛想がいい傾向があるので、純血種のネコたちの性格は変わってきているという印象があります。果たしてそれが環境によるものなのか遺伝によるものなのかは、現時点で切り分けて考えられませんが、積極的に淘汰がかかっていなくても性格が変化していく可能性はあると思います。

西村先生：私も最近ネコがイヌ化していると感じることがしばしばあります。

齋藤先生：ネコが分離不安を抱えているとか・・・。

西村先生：ネコも純血種が流行りだしているのので、イヌと同じような健康問題が出てくる可能性が高いと思います。かなり危険な状態なのではないかと。

—子ども病院などに常勤で働くファシリティー犬と呼ばれるイヌがいますが、アメリカではネコでも同じように病院で働くネコがいると聞きました。ネコは使役を目的として育種されてきたわけではない歴史を考えると、ネコをそのような使役に使っているものかどうか、考えてしまうところがあります。

齋藤先生：少し質問とずれてしまうのですが、ネコはヒトの赤ちゃんにとっても寛容です。私の家ではネコが息子たちにぎゅっと抱きつかれても、乱暴にアタックされても、噛んだりひっかいたりすることはありません。ただ、それがほかの家庭の子どもだとどうなるのか？ということとはなかなか実験してみることができませんが……。おそらくネコは幼弱なものを認識して、それに対して耐える行動をとる特性を持つのだと思います。病院で使役動物として働くにはイヌの方がいいかもしれませんが、ネコもネコで、ただそこにいるという状況だけならば、それはそれで穏やかな刺激になると思います。

—社会化の感受期に環境から受ける影響は、ネコとイヌとの種の違いがあり、イヌなら体のサイズによっても違ってくるのではないかと思います。動物愛護管理法で8週齢問題と呼ばれるものがありますが、すべてに画一的に8週齢としてしまっているのかどうか疑問が残ります。

齋藤先生：ネコの場合は、生まれた直後に母ネコから引き離されて捨てられてしまっても、成長してから行動に問題がでるかといったら、実際にはそうでもないと思います。ですので、8週齢という期間はネコにとっては影響が少ないのではないかと思います。ただし、ネコ本来の持つ行動を考えますと、狩りの学習 (Teaching) など母ネコから学ぶこともいろいろあるはずです。そのような行動をネコが身につける必要があるかどうか、というのもまた別問題となってきますが、もしそのような行動を身につけたネコがいいというならば、ある程度の週齢になるまで母ネコと一緒に過ごし、それから離すほうがいいのではないかと思います。きちんと何週齢とはいえませんが、人間が無理やり引き離すのではなく、離乳を終えてから、母ネコが離れていくか、もしくは子ネコが自ら離れていくか、くらいのタイミングになると思います。

—ネコがヒト前でひっくり返っておなかをさらけ出すのは、心を開いているからなのでしょう？それともヒトの心をつかもうと意識しているからなのでしょう？

齋藤先生：ネコがおなかを見せるは、心を許している部分はあっても信頼しているというレベルではないと思います。単純に、このヒトは危険じゃないな、じゃあ、ひっくり返りたいからひっくり返ろう、といったことかと。ただし、ひっくり返ったことで、ヒトから可愛いねといわれたり、気持ちよく撫でてもらったといった経験があれば、それを学習している可能性はありますね。オペラント条件付けです。

—トリマーをしている関係でネコやイヌの預かりが多いのですが、イヌは懐かないままにいる場合が多いのに比べ、ネコは最初は壁を作っても2、3日すると急に打ち解けてくることが多いです。このようなネコとイヌの違いについてどのようにお考えでしょうか。

齋藤先生：ペットホテルでの状況について知らなかったのですが、ネコは病院に2、3日いれば家にいるような振る舞いになってくる、というのをまさに先ほど伺ったばかりのところでした。きっとイヌがヒトに対して抱くよ

うな絆をネコは抱いていないからかと思います。イヌは分離不安が強い傾向にありますし、絆の証拠として、飼い主と分離したときにはストレスが上がり、再開すると下がるのが分かっています。そういったことがネコにはあまりないのしょうね。ネコは環境が変わってもそれに適応し、さらにはヒトに甘える特徴も持っているため、環境に適応したうえで甘える特徴がペットホテルなどで発揮されているのだと思います。

ーイヌネコの問題行動を専門的に診ていますが、確かに、イヌっぽいネコが増えてきている印象を持っています。日本ではネコを室内飼いにしようという風潮になっていることが背景にあるのではないかと感じます。そして室内飼いに適応できるネコが増えていることもまた、日本のネコの性質が変わってきている原因にあるのかもしれないと思うのですが。

齋藤先生：遺伝的なレベルでの変化もあるかもしれませんが。しかし、ネコが外に行けば刺激をたくさん受け、狩りをする機会があります。そういう行動をネコが経験するとアドレナリンが上がるなど、内分泌系の代謝の変化が起こるはずなので、外の刺激を受けずに生活しているネコの性格が変わってきているのかなと思います。外に行けばたくさん楽しいことがあるかもしれませんが、周囲の理解も必要となりますし、病気をもらってきたり交通事故にあったりする危険も伴います。ですので、ネコの幸せを考えるとどちらがいいのか・・・個々の判断になってきてしまう部分ではないかと思っています。難しい選択ですね。

\*\*\*\*\*

### **研究に参加してくれるネコちゃん大募集！**

東京近郊にお住まいで、ネコのこころを調べる齋藤先生の研究に協力してくださるネコを募集されているそうです。

ご興味のある方は [atsaito@musashino-u.ac.jp](mailto:atsaito@musashino-u.ac.jp) (齋藤先生) までご連絡ください。